

こども教育会議 会議録

日時	場所	出席	小松市長、浦郷教育長 教育委員（古場、河内、岡本、森、犬走、奥川、貝原、一ノ瀬、欠席：副島委員） 松尾こども教育部長、学校教育課（竹内課長）、教育総務課（山田課長、樋渡課長代理）、こども未来課（弦巻課長）、健康課（永渕参事）、企画政策課（松尾課長、富永、古川）
平成 29 年 12 月 25 日（月） 13：30～14：30	武雄市役所 （本庁） 全員協議会室		
1. 協議件名		第 15 回こども教育会議 （発達障がい早期発見とサポート体制について）	

議事録

内容

1 開会（進行：松尾企画政策課長）

2 議事（議事進行：小松市長）

（1）発達障がいの早期発見とサポート体制について

①発達障がいの症状や就学前、就学後のサポート体制について

⇒冒頭に、発達障がいの症状例について説明し、発達障がいのある子どもへの就学前、就学後の当市での対応状況について、健康課・学校教育課・こども未来課から説明を行った後、発達障がいの早期発見とサポート体制について、出席者で意見交換を行った。

②意見交換

<出席者の意見>

- ・発達障がいの早期発見と早期支援は、非常に重要であり、最終目標は就職して、自立できること。その中でも地域社会での交流を通したふれあいが必要であり、学校行事や地域行事への積極的な参加を通じて、社会の一員として自覚を持つ機会を提供し、学ぶことが重要。
- ・以前と比べると、発達障がい等への支援体制が整ってきていると感じる。課題としては、保護者が持つ発達障がいに対する考え方が様々であること。支援に繋ぐためには、専門的見地からアドバイスができる第3者の役割が重要。段階に応じたサポートがある中で、いかに連携して、継続的な支援ができるかが鍵。加えて、市として、発達障がいのある子ども達の就職までの支援について考える必要がある。
- ・自身の指導経験で、生徒の ADHD の疑いを保護者に伝え、支援に繋がった例もあることから、学習指導を行う塾や教育指導を行う団体と組んだ支援について検討してはどうか。
- ・放課後児童クラブでの関わり方は今後の課題であるが、他市の例に倣って、作業療法士等の専門機関と連携した体制づくりを検討することも一つの方法ではないか。
- ・早期発見の観点から、定期検診について、現状として1歳6か月健診、3歳6か月健診が行われているが、加えて5歳児健診の必要性も感じる。小学校に就学する1年前であり、発達障がいの見極めが段階的にでき、スムーズな療育や子育てに不安を抱える保護者の支援にも繋がる。
- ・特異性のある子ども達の居場所づくりは、療育の観点から重要。市内にも民間団体によるサービスが提供されており、今後、地域にも増やすことができれば良い。
- ・教育現場での経験から、子どもに対しては、特徴を理解し、寄り添うことが大事。また、保護者との情報共有や信頼関係を築いて、連携しあうことが必要。
- ・就学相談は、発達障がいのある子どもに対する支援の分かれ目であり、保護者の発達障がいに対する認識や学校の就学支援判定、専門機関の適切なアドバイスが非常に重要。それぞれが密に連携して判断する必要がある。
- ・発達障がいは、個性として捉えることが重要であり、周囲の意識を変える必要がある。的確な判断と適切な指導を今後も継続して行っていく必要がある。

<市長の発言>

- ・発達障がいへの支援については、未就学児の定期健診、臨床心理士等による専門的な相談支援、就学相談、特別支援教育等により段階に応じた対応がなされているが、子どもの年齢によって、関わる人が変わっている。就学前と就学後の切れ目のない支援を行うためには、子どもの貧困対策で取り組む伴走型支援のような工夫が必要。
また、適切な支援を行うには、発達障がいの早期発見が重要であるが、その入り口は、保護者であり、保護者の発達障がいに対する認識や対応によって、支援のタイミングが変わってくる。そのため、保護者のためのサポートをいかに充実させるかが重要。
- ・発達障がいへの理解については、学校現場だけでなく、子ども同士の相互理解や保護者同士の繋がり、地域との関わりあいといった接点を持つことがポイント。
- ・発達障がいのある子どもに対する支援の在り方については、教育委員会部局と市長部局で連携しながら、今後の取組みに繋げていきたい。

3 閉会（進行：松尾企画政策課長）